〔明良帶錄世職〕奥醫師。

醫業ニ達したる人を、奥醫に撰擧す、法印に叙す、七十以上は紅裏を著用す、正月ハ家法の御藥を差上る、當時は醫學館にて醫道を修し、藥生は本草家澀江長伯にて糺す、日々伺公して御脈を診す、醫は仁の術なれば、奥醫といへども、輕きものに藥を與ふ、古橘の先祖は仕切場の物に藥を與ふ、御殿にて人々噂せり、橘聞て、仁術なれば不苦と答へられしを、享保の君〇德川吉宗聞し召給ひて、尤と上意有よし、

〔元治二年武鑑〕奥御醫師　二百俵高　御役料二百俵

坪井信良□　岡田昌碩法眼　多紀永春院法印　戸塚靜春院法印　大膳亮弘玄院法印　津輕良春院法印　遠田澄庵法眼　松本良順□　服部了元法眼　篠崎三伯法眼〇略下

〔御番醫師勤方〕事議擒領錄〕新規御入人之節之事〇略中

一召人於御右筆部屋椽頰、御老中御列座、若年寄中御侍座御用番之御老中方被仰渡候、左之通り、

御番醫師被仰付

但シ二百俵以下之者へハ左之通り

御番醫師被仰付御番料百俵以下

右被仰渡相濟候而、小普請支配より、御目付中へ引渡、御目付より此方へ相達候、又時宜に寄、小普請支配より直に此方へ相送り候事も有之候、右番之者罷出、部屋へ同道致候、

〔御番醫師勤方〕事議擒領錄〕初御番二度目三度目心得之事〇略中

一御夜詰は、夜五ッ時に罷出候、中之口にて、五ッ打候段呼候節、少し見合候て、兩御番申合、焚火之間へ罷出、桔梗之間之方へ御襖際に、新御番組頭、本道外科と並居て、五ッ半之御時計打候節、御目付衆咳拂被致候、急速に一同桔梗之間に入御□之方初め之御柱を後ロに當て、著座す、本